

5月17日

## 福島の実現を伝えたい・知りたい 福島の人たちとの交流・座談会

5月17日、再稼動に揺れるおおい町で「福島の人たちとの交流・座談会」を行いました。福島からは、避難している4名の方々が福島で起こった現実を語り



\* 田中徳雲さん

ました。2ヶ所で約90名の参加。主催はチラシ配りを継続的に行ってきたプルサーマルを心配するふつうの若狭の民の会/グリーン・アクション/美浜の会です。これは私たちが行ったシールアンケートで、おおい町では福島原発事故のようにならないかという心配を多くの人々が抱えていることを知ったことから始まりました。

福島の人たちのお話を一部、以下に紹介します(動画をホームページにアップしています)。

飯舘村の前田地区区長で酪農家である長谷川健一さんは、福島原発が爆発して放射線量が40  $\mu\text{Sv/h}$ になって大騒ぎした時も、3月15日には100  $\mu\text{Sv/h}$ を振り切った時も、村長も国も県も公表せず口止めしたという話から始めました。そんな中、自分の区民を集め、事実を伝え、放射能から身を守るよう「大人も必ずマスクせよ」「上着は玄関で脱げ」「洗濯物は外で干すな」など指示を出しました。他方、村長は放射線を浴びながら生活する方法を模索します。そして計画的避難区域に指定される前日にまで、子どもが外で遊んでも大丈夫、マスクもいらぬという安全安心の説法が御用学者によってされていました。自分たちの牛は大丈夫なのか心配でしたが国も県も村もJAからも指導もなく、自分たちで酪農を廃業することを決めたといいました。最後に牛が餓死した写真を映し、それを豚が食ってるというとてもないことが、この日本、福島県で起こっているんだ、おおい町と福島を入れ替えて考えていただきたい、飯舘村は除染しても子どもたちは帰らない。若い人が戻ってくるような環境じゃない、という実態を切に訴えかけられました。

元中学校の教員で富岡町民である遠藤陽子さんは、事故が起こった時1300人いた子どもたちでしたが、学校再開する際に戻ってきたのは70人だったこと、補償を要求してもなかなかうまくいかない現実、そして家族が分断されたり自分の子どもを守りきれたのか?と悩んでいる実態などお話されました。最後に子どもがいなくなる町に将来はあるのか?と問いかけられました。

大熊町民で新築の地元産住宅に入居直前だった大賀あや子さんは、大熊町での放射能汚染レベルは人が暮らせるまでには下がらないだろうと言いました。10月~12月で除染のモデル事業をするはずが今年4月になってまだ終わらず見通しが立たない話、仮設住宅で過ごしながら大熊町の方である日の出を見て泣いている人がいること、事故前を思い出すたび懐かしいがどうやってこの心を抱えてやっていくんだろうと悩んでいる実情などを語られました。

最後に話された南相馬市から福井県坂井市に避難中である田中徳雲さんは、お寺の住職さんです。「原子力は産業だ」と推進してきた町長が原発の爆発をみて「やっちゃった、俺の人生終わった」と言っていたという裏話がありました。また、どうしてこんなことになったのか、みんなが被害者でありみんなが加害者ではないか、それぞれみんなが声を出し合い社会が腐らないよう「ぬか床をかき混ぜる作業をしよう」と比喩を交え話されました。そして今とても大変な時ですが、ピンチはチャンス、今ならまだ間に合う!と言われ、勇気づけられました。

複雑な思いを抱えるおおい町では、福島の人たちの話にみんなが真剣に耳を傾けていました。